

2019年9月18日 宮城学院創立記念礼拝

必要なことはただ一つ

ルカによる福音書10章38節－42節

嶋田 順 好

この日、創立133周年記念礼拝と共に永年勤続表彰の時を持ち、寺園喜基先生による記念講演、さらに昼食愛餐会の後に墓前礼拝を皆さんと共に持てます幸いを心より喜び、主に感謝したいと存じます。

宮城女学校は、日本人の押川方義牧師とウィリアム・E・ホーイ宣教師によって創立され、初代校長にはエリザベス・R・プールボー宣教師が就任されたことは皆さんもよくご存じだと思います。ホーイ先生も、プールボー先生も、いずれもジャーマン・リフォームド・チャーチ、つまりドイツからアメリカに移民した改革派信徒の人々によって創立された教会から派遣された宣教師たちでした。

ところで皆さんは改革派教会というものをご存じでしょうか。マルティン・ルターがドイツ宗教改革の代表者なら、改革派教会とは、もともとフルドリッヒ・ツヴィングリ、ジャン・カルヴァンというスイス宗教改革の担い手に端を発するプロテスタント教会の流れと言えます。その特徴の一つとして「み言葉によって絶えず改革されること、刷新されること」を重んじたことからリフォームド・チャーチと呼ばれるようになったのです。

今朝は、思いを新たに「み言葉によって絶えず改革される」とはどういうことかということについて、さきほどお読みいただいた聖句を通し、ともどもに思いを巡らしたく願うものです。

38節には「一行が歩いていくうちに、イエスはある村にお入りになった」とあります。主イエスと弟子たちが伝道の旅をしているのです。その旅の最終目的地は、エルサレムです。9章51節に「イエスは天に上げられる時期が近づくと、エルサレムに向かう決意を固められた」と記されているように、すでにこの時、主イエスは、エルサレムへ、ゴルゴタへ、十字架へと、その面を決然とあげて向かわれる決意を固めておられたのです。その旅路の途中、主イエス一行はマルタとマリアの住む家庭に立ち寄るのです。ヨハネによる福音書によれば、マルタとマリアの一家と主イエスとは特別に親しい間柄にあったことが偲べれます。主イエスは、いつも、この村を通りがかるたびに弟子たちと共に姉妹の家庭に立ち寄り、食事をしたり、一夜の宿を借りることを楽しみにしておられたのかもしれませんが。

マルタもマリアも心から主イエスを尊敬し、愛し、慕っていたことでしょう。そうであれば、なおさら、主イエスが今度、自分たちの家にお泊りになったら、こうしてさしあげたい、ああしてさしあげたいと工夫をこらしたくなるにちがいないのです。皆さんも自分の家庭に大事なお客様を迎えるときには、あれこれと準備に心を注がれるのではないのでしょうか。それはごく自然な心の動きとさえいえます。塵にまみれ、腹をすかし、疲れ果てた主イエスが、自分たちの家に立ち寄ってくださるのです。どうして心をこめてもてなさずにいられるのでしょうか。明らかにマルタは、主イエスというかけがえのないお方に対して、自らの豊かな愛を注ごうとしているのです。

マルタという名前はアラム語で「女主人」という意味の言葉です。その名の通り、マルタは、

この家の女主人として、あらゆることを取り仕切っていたにちがいありません。ある聖書学者は、客を「家に迎え入れる」という役割は、本来、その家の主人たる男性の家長がすべき役割だと指摘しています。日本語にも、男性にしか用いられない言葉、女性にしか用いられない言葉があります。たとえば、「あぐらをかく」、「ひげをそる」、という言葉聞いて女性を思い浮かべる人は殆どいないことでしょう。反対に、「柳腰」とか、「白魚のような指」で男性を思い浮かべる人もほとんどいないにちがいないのです。

したがって、客を「家に迎え入れる」という行為は、本来、家長のする振る舞いでした。しかし、ここではそれをマルタがしているのです。従って、注解者のなかにはマルタは未亡人だったのではなかろうかと推察する人もいるのです。そのように考えればマルタは、その細腕で一家を支える重責をも果たしていた責任感も指導力もある、なかなかやり手の女性だったとみなすこともできるでしょう。きっと、マルタは、愛する主イエスと弟子たちの一行を迎えるために、おさおさ怠りなきよう準備万端整えて、今か、今かと一行の到来を待ちわびていたにちがいありません。

一方、マルタの姉妹のマリアは、一体、どのようにして、主イエス一行を迎え入れたのでしょうか。39 節には、マリアが「主の足もとに座って、その話に聞き入っていた」と記されています。ここで「その話」と訳されている語は、直訳すれば「彼の言葉」、すなわち「主の言葉」ということです。マリアは、その「主の言葉」にじっと聞き入っているのです。「いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていた」マルタとなんと対照的な姿でしょうか。

しかも、ここでわたしたちが注目しなければならないのは、マリアが「主の足もとに座っていた」という単純な事実です。現代のわたしたちの目からすれば、別段異常な光景とも思えません。むしろ、主イエスのみ言葉にひたすら聞き入るマリアの姿は、とてもほほえましいものに思えるのです。しかし、当時のユダヤの人々は、女の人が、律法について、聖書学者の足もとに座って、直接その教えを請う資格があるなどは毛頭考えておりませんでした。神の言葉についてラビの足下に座って学ぶ資格があるのは成人の男だけだと考えられていたのです。つまり、女性は差別されていたのです。実際この当時、人数を勘定する時も、女・子供は除外されていました。考えてみれば、日本でも女性が大学で学べるようになったのは、特別な場合を除き、戦後のことなのです。たかだか70年程度にすぎません。そのことを知ると、マリアが今やっていることは、それだけで常識はずれの、大それた振る舞いだったことが分かります。もちろんこの時、主イエスの周りを、ペトロやヨハネのような弟子たちが取り囲んでいたことでしょう。その人々に遠慮したり、ひるむことなく、主イエスににじりより、み言葉に耳を傾けるマリアの熱き思い、そして、そのような自由な振る舞いへとマリアを招いてくださる主イエスの広やかな心に目を留めたいと思うのです。

しかし、マルタは、そのような非礼きわまりないマリアのことで、主イエスに文句を言うのです。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください」と。この言葉を発した時のマルタのことを聖書は「いろいろのもてなしのためせわしく立ち働いていた」と記しています。

マルタは、今、主イエスを接待することで夢中なのです。迎え入れた客も多ければ、たくさん

のご馳走も用意しています。だから決定的に人手が足りないのです。マルタは思います。主イエスに快くくつろいでいただくためには、すべてを一人で準備するのは無理に決まっている。あのマリアが手伝ってくれさえすれば万事順調に進むのだ。わたしだって、イエス様の話に少しでも早く聞き入りたい。そのためにもマリアが手伝うのは当然ではないか。それなのにマリアと言えば、全くの知らんふりを決め込んで、わたしのことや接待のことなど、まるで眼中にないではないか。イエス様もイエス様だ。わたしはあなたのために一所懸命尽くそうとしている。しかし、そのわたしの気持ちを少しも理解しないで、わたしに対するマリアの態度、またイエス様自身に対するマリアの無礼を一向に咎めようともせず、呑気に話を続けておられるのは、どういうことか。

この時のマルタの心の中には、あとからあとから、沸々とマリアを、また主イエスを、責め立てる眩きの言葉が、湧いてきたに違いありません。

きっと、主イエスに直接訴える前に、何度かマルタはマリアに「ちょっと、手伝うように」と目配せしたりしたのではないのでしょうか。しかし、事態は一向に変わりません。ついに業を煮やして、激しく主イエスを問いつめるように訴えたのです。「主よ、わたしの姉妹はわたしだけにもてなしをさせていますが、何ともお思いになりませんか。手伝ってくれるようにおっしゃってください。」

マルタのこの激しい訴えが発せられた時、今までの喜びに満ちた楽しい雰囲気が一転し、一挙に座が白けてしまったのではないのでしょうか。主イエスのために善かれと思って、何日も前からあれやこれやと計画してきたことでした。マルタはどんなに今日という日を楽しみにしてきたことでしょうか。主イエスを歓迎し、主イエスと食卓を囲み、主イエスのみ言葉に聞き入り、皆と一緒に豊かな交流の時としよう、そして思う存分主イエスにくつろいでもらおうとしたマルタの計画は、台無しになってしまったのです。喜びと愛と感謝で始められたはずのもてなしが、怒りと苛立ちと不満の中で、人をなじり、裁くもてなしとなってしまいました。これがマルタのもてなしの現実です。

ところで、40 節で「もてなし」、「もてなす」と訳されている言葉は、ギリシア語では、ディアコニア、ディアコネオーという言葉で、普通は、「奉仕」とか、「仕える」と訳される言葉です。もともとは奴隷が主人の食卓に仕えて給仕役をすることを指す言葉でした。この時のマルタも、主イエスの給仕役になりきろうと張り切っていました。食卓に仕える者として、全力を尽くして、主のお世話をしたいと心を砕いていたのです。マルタは、主イエスも、マリアも愛していました。だからこそ、なおさら自分の思いが相手に伝わらず、自分の一所懸命な思いを相手が全く理解してくれないことに苛立ち、怒るのです。

この物語を説き明かす人の中には、しばしばマルタについて同情的に語る人がおります。マルタのような気配りの行き届いた働き者がいなければ世の中は成り立たないではないというのです。もともと人間の性格にも、マルタ型とマリア型の二つがある。マリアのように内省的で宗教的な人、あるいは実生活の問題には疎くて、何かに熱中し始めると周りのことをすべて忘れてしまう人がいる。それに対してマルタのように働き者で、よく気が利いて、実際的な人もいる。この両方がバランスよく存在しなければ、世の中成り立たない、というのです。こんな説明を受けると、なるほど、言われてみればその通りだ、とお思いになる方もいるに違いありません。しか

し、この聖書のみ言葉は、そのように受け取ってよいものなののでしょうか。わたしたちが、ここで主イエスの取られた態度を世のマルタ型の人間や、その生き方に対して、いささか不当だと考えるなら、むしろわたしたちはここにおけるメッセージを決定的に見失ってしまうことになるのではないのでしょうか。

マルタは恐らく非の打ち所のない働き上手の主婦であったと思います。気持ちの行き届いた世話をすることができる人だったと思います。その点では自分でもいささかの自信があったのでしょうか。それだけに少々気の利かない者や怠け者には、手厳しかったのかも知れません。あるいは、また、自分のもてなしを黙って喜んで受け、感謝してくれる客を好み、自分の思い通りにならない客には腹を立てたのかも知れません。自分は人をもてなすために仕えている、奉仕しているという自信がありますから、他の人のだらしなさや配慮のなさを許せないと思うことも多かったことでしょう。

人間の個性、能力、賜物ということをめぐる思い起こすことがあります。それはもう30年も前になるのでしょうか。わたしが牧会していた教会で「マザー・テレサとその世界」という映画の上映会をした時のことです。マザー・テレサという人のことは皆さんよくご存じだと思います。インドのコルカタで「愛の宣教者会」という修道会を始められた方です。ノーベル平和賞も受賞されていますが、最も貧しい人、路上に行き倒れている人、社会の誰からも省みられない人々に愛の手を差し伸べ続けたシスターです。現在では世界の様々なところでその修道会の働きが展開されています。そのマザー・テレサの活動ぶりを記録映画にした作品の上映会を教会で持ったのです。自動車を運転し、撮影の機材を運び込み、大きなスクリーンを張り、30キロ近い重さの16ミリ映写機を動かすのは、女子パウロ会の3人のシスターたちでした。実に手際よくてきぱきと力仕事をこなしていきます。手慣れていると言えばそれまでのことかもしれませんが、本当に感心してしまいました。

カトリック教会にはたくさんの修道会があります。すべての修道会に共通していることは、清貧、貞潔、従順を貫くことです。しかし、それ以外にもそれぞれの修道院ならではの特徴を持っているのです。たとえば、ベネディクト会、トラピスト会は、ひたすら祈りに集中します。イエズス会やラサール会は、教育に力を注ぎます。学校を運営するのです。それでは、パウロ会とか、女子パウロ会は何をする修道会なのでしょう。それは出版・印刷等のマスメディアを用いて伝道のために働くことを使命にしています。皆さんのなかにも、とても素敵なた花柄の聖句入り葉書やカードの片隅に、小さく「女子パウロ会」と印刷されているのをご覧になった方もいるでしょう。これ以外にも、書籍、映画、DVD等、実に様々な媒体を通して宣教のための働きを担っているのです、

教会に来られたシスターたちの水際だった働きぶりに感心して、上映が終わった後に思わずわたしは尋ねてしまいました。「皆さんは、とても生き生きと仕事をしておられますが、やはり出版・編集・映画などの仕事に関心もあり、その方面の才能も豊かなので女子パウロ会に入られたのですか」と。すると、「賜物がある、能力があるということは、一番大事なことはありません。もちろん、賜物があることは大事なことです。が、むしろ、賜物があり、能力があることが、うぬぼれや傲慢を生み出し、修道生活の妨げになることもあるのです。」静かに、しかし確信を持ってリーダー格のシスターが言い切られたことでした。

マルタの激しい訴え、一瞬、何事が起こったのかと弟子たちも驚き、緊張が高まる中で、主イエスは、その場のささくれだつた雰囲気やゆっくりと解きほぐすように、マルタに心をこめて語りかけます。

「マルタ、マルタ、あなたは多くのことに思い悩み、心を乱している。しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。」

主イエスは、ここではっきりとお語りになります。「必要なことはただ一つだけである」と。注意していただきたい。主イエスは、決してマルタの生き方も、マリアの生き方もあるなどとは仰ってはいません。マリアは自分の性格や生き方などということではなく、主イエスが来られた時、まず自分がなすべきことをしただけなのです。それを主ご自身が、これこそ「ただ一つの必要なこと」と呼び、これをマリアから取り上げてはならないと言われたのです。

なにより主イエスご自身も弟子たちの先頭に立って、その伝道の働きをしておられたのです。マルタとマリアの家においても主はまずその使命を果たされようとし、ます。だからこそ、主イエスは、休む暇もなく、み言葉を語り始められたのです。もはやエルサレムへの、十字架への旅は始められたのです。後戻りはできません。二度とマルタとマリアの家を訪れることはできないかもしれないのです。だからこそ、今、この時しか語れない福音を語るのです。そこで人がなすべきこと、それは先ずもって主の言葉を受け入れることだけあります。

マリアが聞き入っていたのは、「主の言葉」でした。「主の言葉」として、これを聞くということは、この主の言葉を自分の中に受け入れるということです。いや、主の言葉の支配の中に、自分を入れてしまうのです。それは自分が自分の主人であることを止めることです。

考えてみれば、マルタは、まさしく「女主人」というその名の意味が示すように、ここでもなお自らが主人であり続けようとしたのではないのでしょうか。いつの間にか、「主よ」、「主よ」と言いながら、唯一の主である方の御前で、その方をさしおいて自らが主人になろうとしていました。主イエスも、マリアも、まず自分の指図に従い、言うとおりに動いて欲しいと思うようになっていたのです。マルタは知ると知らざるのうちに仕える形において、人を自分に仕えさせようとしていたのです。

このように見てくると「わたしたちのもてなし」、「わたしたちの働き」の現実がよく見えてくるのではないのでしょうか。事実、わたしたちが日々の働く現場において、しばしば耳にし、又口にする言葉も、今ここでマルタの口からでた不満の言葉ではないのでしょうか。自分はこんなに一所懸命にやっている。それなのに、あの人もこの人もなんていい加減なのだろう、とつい周りの人々を裁いてしまう思いです。そのことにより時として抜き差しならぬ対立と不満が渦巻くこともあるのです。

勿論、今、ここでみ言葉を語るこのわたしも、まさしくそのようなマルタの思いに囚われる者です。主イエスは誰よりもそのことをよくご存じでした。だからこそ、わたしたちが、わたしたちの思いと力だけに頼って仕えよう、働こうと思う時に、声をかけてくださるのです。あなたがなそうとするその業の前に、あなたに必要なことがただ一つだけある。その必要なことが、欠けている間は、あなたがどんなに善き奉仕、よき働きをしようとしても、実り豊かな働きとなることはないだろう。否、あなたがよく働こうとすればするほど、あなたはその中で、怒りと苛立ち

と不満を抱くだろう、と仰るのです。

ここで本当の「もてなし」、「奉仕」、「接待」をしておられるのは、実は主イエスご自身なのです。その主の「もてなし」を受けることが一切に先立ちます。主ご自身がそこにいてくださること、そしてみ言葉をもつてもてなしてくださること、これを受け入れるのです。まさに主を礼拝する。そのみ言葉の宴に加わる。そこでまず自分が癒やされるのです。このように主イエスに癒やされる経験を得てこそ、わたしたちは立つことができます。自分と共に生きる人に、自分のような者でも、真実ないたわりの手を伸ばすことができるようになるのです。

それはどうしてでしょうか。この言葉を語られる方、この欠くべからざるものを差し出すお方は、マルタの思いを抱く罪人のわたしたちのために十字架にまで徹底して神に仕え、人に仕え切って下さった方だからです。

全く無実の者が、ののしられ、唾をはきかけられ、十字架の上で死んでいった時、今、自分を殺さんとする者に向かって、投げかける言葉が、心の底から湧きあがる激しい怒りと呪いの言葉でなくてなんでしょう。しかし、このお方は、その時、次のような執り成しの祈りを献げて下さる方でした。

「父よ、彼らをお赦してください。自分が何をしているのか知らないのです」と。

ここでマルタに、そしてマリアにただ一つの必要なものを差し出してくださいとお方は、文字通り、愛を語り抜き、愛に生ききり、罪人に仕え切って十字架におかかりになってくださった方なのです。

主イエスは、マルタをも招いておられると思います。マルタにまず自分の言葉を聞いて欲しいと願っておられます。その時、マルタも、人をもてなし、人に仕えることは、本当はどういうことが分かると思います。そこではマルタ型とかマリア型とかという区別も、それに基づく自己主張や正当化も、相手を裁く思いもなくなってしまうのです。

マザー・テレサの映画を見ていて深く心に残ることは、マザーが、奉仕の一切に先立って毎日午前6時から持たれるミサに真剣に連なる姿です。そこで、キリストのもてなしを受け、キリストの裂かれしみ体に与るのです。そこから愛の宣教者としてコルカタの町に出ていく力が与えられます。主がそこにおられ、その愛を注ぎ、マザーを生かしてくださいからです。

この主イエスの愛こそ、わたしたち皆に必要なただ一つのことなのです。言い換えれば、み言葉によって絶えず改革され、刷新される自らであり続けること、それが宮城学院というミッション・スクールで働く者にとって「必要なただ一つのこと」にほかなりません。